

8月報(2021年) 萌 カトリック福山教会



福山教会活動テーマ：

「喜びをもっていのちをもたらす福音を社会に伝えよう」

〒720-0808 福山市昭和町 7-26

☎【084】923-0614 FAX【084】923-0615

e-mail : fuku-ch@ktd.biglobe.ne.jp



聖マリアの被昇天の祭日が近づいています。 猪口神父

この被昇天について教義として明確に定義されたのは意外と新しく、教皇ピオ 12 世によって荘厳に宣言された 1950 年 11 月 1 日のことです。同日発布された『ムニフィチェンティシムス・デウス』という文書の中には、「マリアがその地上の生活を終わった後、肉身と靈魂とともに天の栄光にあげられたことは、神によって啓示された真理であると宣言し、布告し、定義する」(DH. 3903.)とあります。

教義について定義する文章である以上、その形式や読み方というものがありますが、それを忘れると一見時代遅れの権威主義的な主張にも見えます。実際、当時東方の正教会からは、伝統的に聖母の被昇天に

ついて認められてきたにも関わらず、改めて西方教会のローマ司教である教皇が全世界に向けて教義として宣言することについて反発する向きがあったようですし、プロテスタント諸派からは聖書に基づかない主張を行っているという批判もされたようです。

誤解されることもあります。教義について正式に定義することは、都合の良いように教義を変更し決定することではありません。それまで受け継がれてきた信仰を、改めて表現しなおすことと言ってよいでしょう。本質において変わらずとも、その表現においては変わりうるのです。むしろ、その教えを宣べ伝えるに際して相手に分かる言語を用いなければならないように、新たに表現しなおしていく努力は怠るべきではないでしょう。

ところで聖画像をみると、「生神女就眠図」のような聖マリアについてその死の時を描いたものがあるのに気づかされます。それを見て何か「東方では聖マリアの被昇天を認めず、反対に西方では聖マリアの死を認めていない」などと早合点することもあるようです。しかし実は東方のイコンばかりではなく、西方にも同様の図像があります。実際、教皇四大バジリカの一つであるサンタ・マリア・マッジョーレにも、聖マリアの生涯の終わりを描いたモザイクがあるくらいです。そしてそれらは、聖マリアの地上の生涯の終わりから、天上での命への移り変わりという一連の「遷化(トランジトゥス)」の流れの中に位置づけられています。

既に東方では7世紀の初めには8月15日に「アナパウシス」または「コイメーシス」とギリシャ語で云うそうですが、聖マリアの生涯の終わりを記念していたことが分かっています。その後、しばらくするとそれらは被昇天を意味する「アナプレーシス」と呼ばれるようになって行きました。時を概ね同じくして西方でも眠りを意味する「ドルミツィオ」と呼んで聖マリアの地上の生活の終わりを記念し、やがて東方に比べ少し時間があつたようですが、8世紀から9世紀には被昇天を意味する「アッスンプツィオ」と言われるようになりました。つまり、「地上の生の終わ

り」と「被昇天」は本来矛盾したり対立したりするものではなく、聖マリアが天上で命と栄光に与る一連の出来事であり、伝統的に教会の信仰において保持されてきたということが出来ます。さてピオ 12 世が被昇天を教義と定義した文章の中に「マリアがその地上の生活を終わった後」とは書かれていますが、肉体的な意味での死を経験したか否かについては明言されていません。死を経験せず天上にあげられたと考える人々に配慮したそうですが、死の瞬間や被昇天の瞬間などを細かく定義することは困難でしょうし、信仰の上ではあまり意味がないことでしょう。いずれの立場であれ、被昇天とは地上の生活の終わりを意味するからです。教義について考えたり話したりする時には、教義が定義されるにあたって、特に明言されていない部分がたくさんあることも理解しておく必要があります。

また主の昇天についても言えることですが、被昇天などの「天」や「上げられる」という表現に空間的な表象が用いられていても、別に「上空」を意味しているのではないということです。むしろ空間的な表象を用いて、神の命に一致することを指しています。教義が定義される時には、他の教義に用いられる聖書や伝統にしたがった用語や表現を用いることがよくあります。定義されたのは 1950 年ではありますが、その表現の背後には伝統的な用語法があります。現代の感覚からして、聖マリアの被昇天の教義について違和感を覚えることがあるとすれば、おそらくそれは表現に由来するものです。

聖マリアの被昇天について「肉身と霊魂とともに天の栄光にあげられた」と定義されているのですが、これも用語上の歴史的な背景を持ちます。例えば聖体の秘跡を考えてみていただけると分かりやすいかと思いますが、私たちは「キリストのからだ」である聖体の秘跡を受けますけれども、それは「愛の秘跡」でもあります。私たちが聖体を受ける時、「キリストの肉身に与って、その愛に与らない」などということはないと思います。人間を精神と肉に分離して、どちらかが実体であるかのように考えることは、実は少し無理があるのです。

「肉体」と「霊魂」を対立する概念のように捉えて人間を二分する考え方を「霊肉二元論」などと言いますが、古代のギリシャ哲学などに顕著で、その影響を受けたヘレニズム社会の思想的枠組みをなしていました。初期の教会はそのヘレニズム社会で宣教するに際し、人々との対話のためにギリシャ哲学由来の概念を用いて語るようにもなりました。ヘレニズム文化圏では霊魂や精神の優越性が強く主張され、肉体や物質は時に害悪であるかのように軽視される傾向があったことは、例えばアレオパゴスで使徒パウロが語ることが一笑に付された使徒言行録の記事などからも分かります。教会は人間を霊肉二元論的に捉えるのではなく、統合的に捉えていたわけですが、それでも二元的に捉える人々と対話するに際しては、「霊魂も肉体も」と語るしかないわけです。信仰宣言においてもわざわざ「からだの復活」と表明することで、人間を霊魂だけで捉えてはいないことを示しています。

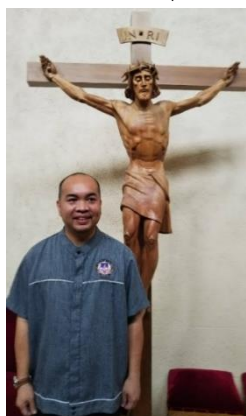
この流れを受けて、伝統的な終末論では人間が死後、清めの必要がない場合にはその霊魂は直ちに神の命と救いに与るが、肉体は終わりの時に復活し「霊の体」(I コリント 15:44)へと変えられるとされます。そしてキリストは他の死者に先立って復活した「初穂」(I コリント 15:20 参照)と言われます。この伝統的な形式に聖マリアの被昇天の教義を位置づけると、聖マリアは終末の時を待たず、特別な恵みによってキリストのような在り方で復活に与っていると表明されていることとなります。

ただ、少し現代的に「からだ」を単純に物質的な意味での肉体としてだけではなく、人が世界に存在しその世界で他者と関わる場として、いわば「身体性」として捉えてみましょう。この時「からだ」とは人が自己を表現し、他者と交わる(コミュニケーション)ものであり、言い換えると人間の在り方そのものとも言えます。そしてここでは深入りしませんが、精神と肉体を殊更に分離して人間の実体をいずれか一方に求めることは、実際あまり意味のあることではありません。そして「清め」と呼ばれるものが時間的なものではないことを前提とすると、人間の死と復活を、死の直後と世の終わりの分離した二つの時間に求める必要もなくなります。

そうすると聖マリアの被昇天の教義は、私たち人間が与る救いについて語っていると理解されます。もちろん聖マリアはそれを完全に理想的な形で受けているのですが、それでも私たちが与る救いと別のものなのではありません。聖マリアを称える時、その恵みを自分にも与えてくださる方を称えています。

ダン神父さま、叙階 10 周年記念 おめでとうございます！

7月19日(日)9:00 ミサ中に、ダン神父さまの叙階10周年記念をお祝いしました。神父さまのプロフィールと叙階から10年の歩みや思い出を紹介します。(協働部会)



【ダン神父さまプロフィール】

- ・フルネーム：ゼルナ・ロルダン・オリラン（愛称：ダン神父）
- ・1983年12月29日生まれの37歳

【出身地&家族等々】私は、東ネグロス島のドウウマゲテ出身です。私が生後3か月の時、両親はルソン島のbulakanの地域に転居することにしました。私はbulakanで育ちました。高校卒業後、フィリピン宣教会の神学校に入学。12年後、私は、司祭として叙階されました。私は、5人兄弟がいます。3人男の子二人女の子。2番目で姉がいて、自分は長男。全てが今、結婚しています。

- ・フィリピン宣教会の司祭 2011年6月4日叙階
- ・2011~13 叙階式後：最初の派遣先：パプアニューギニアで宣教(2年間)

【思い出①】私は、パプアニューギニアにいる時は、毎日家庭訪問やりました。遠いところへ行きました。信者たちは、とても喜びました。いろいろな言葉を学びました。現地の人々の生活になれ、現地の人々の考えを共有しました。私は、フィリピン人じゃない位でした。私は、彼らと同じ仲間になりました。私は、一番じゃないですけど、私は、愛された司祭になりました。

- ・2013~沖縄(那覇)教区へ：沖縄沖縄読谷村(7年間 2020.4迄)

(読谷村の教会は殆どがフィリピン人とアメリカ人で日本人は少なかったです。)

【思い出②】読谷教会の仕事は、パプアニューギニアとは、とても違うものでした。フィリピン人がたくさんいました。そしてアメリカ人も多かったです。いつも英語を話しましたからとても便利でした。沖縄はきれいなところです。クリスマスの時は、いちばん賑やかでした。いろいろなイベントがありました。

- ・2020年10月25日広島教区(幟町教会へ)
- ・2020年11月8日~ 現在：カトリック福山教会助任司祭

【これからの希望】私は、福山に来たので、まず文化を学び、奉仕する人々を知りたいと思っています。2 番目は言語です。私は日本語が苦手ですそれを学び、使うために最善を尽くしています。教区民と一緒に直に過ごしたいと思います。そこから、教会のためにどんな計画や活動ができるかがわかります。このパンデミックで私たちが多くのことをすることができないのは悲しいことですが、それは私たちが諦めることを意味するのではなく、むしろ私たちが祈りの時間を倍増することを奨励して



います。福山教会の信者たちには、何も約束していませんが確かに福音の喜びを皆さんに分ち合いたいと思います。私の個人的な経験とイエスとの出会い。それが私が持っているすべてであり、あなたもイエスとのあなた自身の個人的な経験を持っていることを分ち合いたいと思います。うまく行けば、私たちは一緒に旅をし、信仰をもって成長します。

【私の好きな食べ物&趣味】

私は好きな食べ物、肉です。私の趣味は、バドミントンとバスケットボールです。



*フィリピン宣教会 Mission Society of the Philippines : 1955年、フィリピンCBCP(フィリピンカトリック司教団)によって、設立された。フィリピンの(ラグナ)に本部。会員は、100名前後。日本・台湾・韓国・タイ・ネザールランド・ベルギー・アメリカ・ニュージーランド・オーストラリア・パプアニューギニア・ドバイ・オマーン・クックアイランド・トケラク島・ツバルに派遣されている。日本には、那覇教区・京都教区・広島教区の3つの教区だけ。広島教区は、ダン神父と岡山教会のジョン・ボルドン神父の二人。

2021年7月19日 街頭募金報告

福祉部 伊藤望



「沖に漕ぎ出そう」の広島教区の標語をまだ覚えておられる方もおられるでしょう。私たちはその言葉通り、福山駅前に出かけて行って募金活動をしました。今回は地元に向けての第2弾(去年はそらまめ子ども食堂)として福山市社会協議会(社協)宛てです。コロナ禍に直面し生活に苦しむ人々に特に食料支援としてこの募金が使われます。

参加者は日曜学校、中高校生会約13人を含め総勢約20名でわずか1時間でしたが行いました。行動はわずかですが、かつてマザーテレサは0をいくら積み重ねても0ですが、0,01でも寄せ集まれば大きな力になると言われました。私たちはこの小さな、ささやかな捧げものを捧げます。教会共同体として街頭募金を行うことについて私はこの中に大きな宝がいくつも隠されていると思います。例えば参加した子どもたちにとっても誰



かの役に立つことの実感が与えられたと思います。「五つのパンと二匹の魚」の話を思い浮かべました。小さなグループで行うことはとても良いことです。ここに共同体としての喜びがあり、力が出ます。

募金額 19,673 円でした。教会の皆様への感謝と共に報告します。

福山空襲にあたって 2008年8月8日 主任司祭 早副 穰

戦争の悲惨さは負け戦になると痛切に体験させられました。8月6日の広島原爆 8月9日の長崎原爆、その間にはさまれた8月8日の福山空襲の日、多くの生命財産が失われたことが歴史の陰に隠されてしまっているように感じます。身近に激しい空襲を体験された証人が世を去って行かれると、知的な記憶にとどまるだけになってしまいます。

戦争に勝ち進んでいるときは、他の民族や国家に悲惨さを押し付け、膨大な軍事費を使い、他国の生命財産をぶつつぶしてゆきました。

戦争は勝っても負けても人類にとって巨大な損失であることを思い、世界中が平和に生きる力を探し求め、祈り追憶の日としましょう。

戦争は人間の仕業です 戦争は人間の生命の破壊です 戦争は死です

ヨハネパウロⅡ世

福山空襲の概要 2001年8月8日福山空襲犠牲者追悼ミサの記録から

1945年（昭和20年）8月8日午後9時30分頃、一発の照明弾が船町上空で炸裂。市街は一瞬真昼のように浮かび上がった。間もなく南方海上箕島上空から北東に進路をとったB29の大編隊が市内に侵入、沖野上、奈良津、木之庄方面に火柱が上がった。後続の米軍機は、やがて周辺部から中心部へと攻撃を開始。ザーザーと降り注ぐ雨のような不気味な音と共に焼夷弾が落下。瀬戸の波に火柱が散り、低空を飛ぶB29の銀翼が紅に染まる。約1時間にわたる攻撃は、やがて市内を火の海と化し、市役所、警察、駅を始め主な建物、学校はまたたくまに焼け落ち、国宝天守閣も福山の悲しみを象徴するかのよう崩れ落ちた。

アメリカ空軍による本土空襲が本格的になったのは1944年11月からで、1945年8月15日の終戦まで、空襲は休みなく続けられた。9ヶ月にわたる空襲は、その特徴から大体3期に分けることができる。

第一期は、工業地帯を壊滅させることを主目標に、昼間の約1万メートルの高度からの精密爆撃が中心であった。

第二期は、工業地帯を含む大都市に対して夜間、低空から無差別焼夷弾攻撃を行い、都市もろとも工業地帯を破壊することにあつた。

第三期は、空襲の重点を中小工業都市におき、無差別焼夷弾爆撃によって日本の工業生産力を根こそぎ破滅させようとした。

福山市に対する空襲は第三期にあたり、最初は市の南東に位置した海軍航空隊への機銃掃射が

グラマン戦闘機によって繰り返された。

1945年7月31日夜、アメリカ軍は約8万枚の宣伝ビラを空中散布し空襲の予告をおこなった。

その後1週間を経過した8月8日、テニアン島を基地にしていた第58航空団のB29爆撃機91機によって福山は大空襲を受けた。

空襲が始まると大多数の市民は市郊外に避難を開始したが、防火活動に従事して逃げ遅れた人々、爆撃に対する防御として防空壕から離れなかった人々、すさまじい炎と煙に巻かれて逃げ場を失った人々等、多数の犠牲者が出た。

夜明けとともに、幹線道路の確保、被災者の救済、遺体処理等が始まった。その活動が終わったのは、9月6日である。

福山空襲から一週間後に、日本は終戦を迎えた。

市街地焼失面積 314ヘクタール（市街地の80%） 犠牲者数 352人（他に不明者 31人） 重軽傷者数 864人 焼失家屋数 10,179戸 被災人口 47,326人（市民の81%）

【シリーズ2：教区代表者会議】 教区代表者会議ってな～に？ （2） 田中 靖

前号では11月23日に開かれる教区代表者会議の説明をしました。今回は福山教会から参加される信徒代議員のお二人が参加する分科会についてご紹介します。

多文化共生分科会（代議員：野田茂生さん）

●課題として取り組むこと

- ・全ての外国籍信徒との交流や共生
- ・急増する滞日ベトナム人との関わり
- ・外国籍信徒の宣教司牧に関する方針
- ・外国語ミサと秘跡執行の円滑な運営

ご存知の通り、日本で暮らす外国人の方々が増えてきており、特にベトナムの方は技能実習や留学のため滞在される若者が急増し、今や最も人数が多い外国人となりました。異なる文化や習慣のもと、日本語の問題もあり生活上の課題を持っている外国人の方々も少なくありません。このような私たちの隣人に対して私たちはどのように共に生きることができるかを考え、行動することはとても大事なことです。

一方、外国語ミサの実施や外国籍信徒の皆様への福音宣教、信仰継承をどのように進めていくかという課題も大きなものです。外国籍信徒の皆さんへの宣教司牧方針を教区として定め、それに基づいて外国語ミサの秘跡執行に関わる課題の解決、広範囲の小教区をカバーする外国語ミサ担当司祭へのサポートなど、考えていかねばならない点は多くあります。

協働分科会（代議員：藤井幸恵さん）

●課題として取り組むこと

- ・教区組織、機構の整理と可視化、および、財務面（施設維持含む）の互助
- ・地区の役割の明確化と、地区同士および協働体制同士の協働の推進
- ・小教区の現状の把握、協働体制の深化
- ・伝えるだけでなく、伝わることを重視した活動
- ・一人ひとりが孤立せず、共に働こう

司祭、信徒の高齢化が進む中、私たち教会を取り巻く課題は社会情勢の変化もあり絶える事はありません。私たちの福山教会は他の小教区と違って信徒数も多く教会活動も活発に行われていますが、他の小教区では信徒数が減り変化への対応が難しくなっている所もあります。私たちは「共に協力して働く：協働」をもう一度見直し、広島教区として連帯して共にキリストの平和を達成する事が求められています。今まで信徒が直接タッチしてこなかった課題に対しても取り組み、広島教区、広島地区、備後協働体（福山、尾道、三原、三次）、そして小教区である福山教会の中で、どのように協働していくか、改めて考える必要があります。

教区代表者会議の準備を今まで進めてきましたが、いよいよこれから福山教会での話し合いや分かち合いが代議員の方々を中心に始まります。次回からは代議員の皆さんにバトンタッチして、さらに話を進めていきたいと思えます。

南相馬便り⑩ 2021年7月 援助マリア修道会南相馬修道院 北村令子

大雨の時期になりました。嚴重注意でお過ごしください。こちらはまだ朝晩は涼しいです。

私はワクチン接種を5月18日と6月15日に済ませました。皆さんはいかがですか？新型コロナ感染症もワクチン接種が普及していくなら、収まってくれるのでしょうか。オリパラ後は？？

コロナ感染症拡大によって、首都圏をはじめ広島県も含め各地に緊急事態宣言が出され、この一年半余り経済活動に制限がかかり、生活困窮に陥った方が多くとても心を痛めています。この



状況の中でカリタス南相馬は、全国からのボランティアを受け入れることができず、いろんなボランティア活動ができない状況にあります。それでも今必要とし、できることは何かと探しました。幸いにいろんな方からレトルト食品やインスタント食品のような支援物資が送られてきたり、この状況下で必要な方に役立ててくださいと寄付金を送ってくださる方々の善意に支えられて、生活困窮に陥

った一人親家庭、外国人労働者、技能実習生にお米を配ることを始めました。頂いた寄付金で、南相馬市の農家からお米を購入して配ります。外国人労働者や技能実習生は、本国の家族に仕送りをしているので、送金額を減らさないために、自分の食費を切り詰めているので、お米の支援は大変助かるということです。まさに命をつなぐ働きが、多くの方の善意で実現できることは本当にありがたいことです。原発被災などで若い人の労働力が少ないためか？外国人労働者が多いのに驚きました。一人親家庭は、2月から始めて、20家族くらいで、子供さんの数が多いのが特徴でしょうか。小さい子供さんから中高生の食べ盛りの子供を抱えたお母さんは、本当に喜んでくださいます。

4月には卒業・入学・進級などのお祝いに、図書券をお配りしてとても喜ばれました。中にはお母さんが手に障害があり、中学生の男の子がお米を抱えて、お母さんを助けている姿は微笑ましく頼もしい感じがします。その男の子も今年中学を卒業して、小高の産業技術高校に進学したと聞きました。原町から電車で小高に来るのでしょうか。いつか小高駅で会えれば嬉しいなと思っています。

外国人労働者や技能実習生は、4月から始めて、月に80人から95人ほど来られます。国籍は色々で、ベトナム人が一番多く、フィリピン人、中国人、インドネシア人、ネパール人な

ど。ある日、4人の若者（男性）がやってきました。全員フィリピン人だと言います。中に2年前に日本に来たという人がいて、少し日本語が話せたので、「フィリピンならカトリックですか？」と聞くと、「ハイみんなカトリックです。」「今度の日曜日（6月6日）から公開ミサになるのでいらっしゃい。」と言うと、「日曜日はお仕事があるから来られません。」と言います。「お仕事なら仕方ないね。教会はいつでも開いているから、来られる時にお祈りに来たらいいよ。」と言うと、「今、お聖堂は開いていますか？」と言うので、「開いているからどうぞ。」と言うと、4人ともすぐお聖堂に入っていました。しばらくして、戻って来て、丁寧にお辞儀をして、「ありがとうございました」と、挨拶をして自転車で帰って行きました。フィリピン人は本当に信心深いです。

私たち3人は週2回火曜日と金曜日に、なんばんひろば（小高工房で以前ぷらっとほ一むの名称でしていた活動の継続）に行き、地元の人とのかかわりを深めたいと思っていますが、コロナの状況下で、関わりそのものが制限され、困って居ます。でも共にいることを大切にしたいと出かけています。その他に、シスター鈴木は金曜日に精神障害者の授産所のボランティアに、私は木曜日に浪江の精神障害者の傾聴・見守りボランティア（生存確認のため）に4月から行き始めました。必要とされる場所に私たちの小さな力で出来ることに応えたいと日々元気で励んでいます。



まだまだ伝えたいことはありますが、今日はここまでとします。

外国人の方々への支援は資金の関係で6月をもって一旦終了し、本当に困っている人に限定して継続的にすること、また一人親家庭困窮者はまだしばらく継続できると考えています。

8月・9月の行事予定

8月		9月	
6(金)	主の変容 広島平和行事	5(日)	敬老会 国際聖体大会
8(日)	福山空襲追悼	8(水)	聖マリアの誕生
9(月)	長崎原爆の日	20(月)	広島教区の日(山口徳山教会)
15(日)	聖母の被昇天 猪口神父様霊名のお祝い	26(日)	世界難民移住移動者の日

一年の中でも、特に8月は戦争の惨禍を思い起こす月です。戦争体験者の高齢化が進む今、その体験をしっかりと受け止め、語り継ぐことが私たちに課されているといえるでしょう。私たちひとりひとりが、社会で、また家庭で、平和をもたらす使徒であるよう、努力を重ねていきたいものです。

また、どんな短い文章でも構わないので、皆さまからの原稿をお待ちしております

月報委員会